

大手ファブ トップインタビュー⑥

2020年 わが社の 経営戦略

川岸工業



金本 秀雄社長

業績について。

金本 当社は9月決算だが、今期の通期予想として、いる売上高200億円、経常利益10億円は、いずれも達成すると見込んでいる。

業計画を検討中にあるが、現在製作中の案件が来年3月までに完了する。後半にかけて採算面で苦戦するかも知れない。

来春以降の仕事量の確保が課題ということに。

1年9月30日)の目標は、今期に比べ、やや売上高は落ちるものの、経常利益は同額程度を維持したい。受注する仕事の量は約80%を想定している。具体的な事

採算を無視して、量を追う行為は最終的に自らの首を絞めることになり、その結果は、これまでの業界の歴史をみても明らかだ。

また、当社の営業方針は受注工事の全量を自社製作することであり、原則外注はしないとしている。受注量が若干減っても従業員を減らすつもりはない。現場で働く従業員は重要なインフラであり、そのコアの部分を守らなければならない。我々の仕事は、自動化すべき工程は全て機械化が



ただ、受注機会の創出など企業努力は必要だと考えている。この数年をかけて工場の設備やレイアウトなど内容の拡充を図り、お客様が求めるどのような仕事でも製作できるよ

うに基盤整備の構築を図ってきた。具体的には受注構成が、超高層とコラム日の一般鉄骨の各比率が50%の受注構成になるような体制とした。一般鉄骨の比率が増えるが、決して超高層案件の仕事が減らず考へはない。

製作基盤体制の再構築を図る やり甲斐と誇りが持てる職場環境に

進んだが、最終的には組立、溶接などの工程は従業員、特に熟練工の技量に頼る部分が大きく、その要求品質の積み重ねが今日の当社の評価となっている。

——新型コロナウイルスの影響は。

金本 今年も東京五輪開幕を想定して、6月以降の鉄骨建方工事や出件量もともと少なかつた。しかも

新型コロナで開幕延期となり、都心の大型案件の再開が3~6カ月ずれ込んでいる状況にある。年末から来年は多くの仕事量を見込めない状況にあるとみている。

新型コロナで当社も様々な影響を受けたが、今後、懸念しているものがプロジェクトの中断や設計の見直しなどで、受注して事前にコストを決めていたものが、変動する可能性もある。これは当社だけでなく、同業他社も同じ悩みを抱えているのではない。

——設備投資は。

金本 3カ年の歳月と約20億円を投資して取り組んできた第一工場の加工棟の新築・増設や新事務所、製品置場の建設などの大幅な設備計画がこの9月で完了する。一段落の状況だが、投資計画は今後も継続する。



竹芝地区(都内)

——技術開発への対応は。

金本 4面ボックスにおける技術開発として、現在65mmまでの高張力鋼の要求品質に対してIパスで角溶接ができるようにJFESチールと神戸製鋼所で継続して共同実験を行っている。すでに作業標準化したものもある。

このと同じ比重で従業員の底上げを図る必要がある。会社の利益を従業員に還元するという考え方で取り組むべきだと思う。

特に若手が技術を学び、育ち、仲間と伸び伸び働ける職場の環境づくり、やり甲斐と誇りの持てる給与水準のなかで、要求品質に込められる企業、顧客満足度の高いものづくりができる企業を目指していきたいと考えている。

(聞き手 大熊稔、文中・敬称略)